

巻頭特集

ブリティッシュ・カウンシルの  
活動紹介

英国学術調査報告

世界大学ランキングと  
いかに向き合うか

第四回 在英研究者の者窓から

No. 45

JSPS London

# NEWSLETTER

日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター 2015年5月～7月 ニュースレター

巻頭特集「ブリティッシュ・カウンシルの活動紹介」	2	英国学術調査報告	11	日本政府系法人勉強会（通称アドミ会）に出席	18
UK-Japan Silicon Nanoelectronics and Nanotechnology Symposium in Southampton	4	世界大学ランキングといかに向き合うか 2分でわかる！ファンドレージング入門	15	JBUK/JSPS London 共催の日英交流イベント	18
JSPS London Funding Programme Information Event	5	在英研究者の者窓から 第四回	16	JSPS Programme Information	19
センター長のつぶやき	7	ぼりーさんの英国玉手箱	17	大萱副センター長ご挨拶	20

# 巻頭特集 ブリティッシュ・カウンシルの活動紹介



第6回英国大学視察訪問（2014年11月）

## 組織概要

ブリティッシュ・カウンシル（The British Council）は、教育機会と文化交流を目指す英国の公的な国際文化交流機関である。1934年に設立され、現在、世界100以上の国と地域に190以上のオフィスを展開している。

英国では王立憲章（Royal Charter）により非営利の公益団体（Charity）として登録され、無所属の（特定の省庁の直下に属さない）公共機関としての独立性を有する。その活動財源の一部は、英国外務省を通じて英国政府から補助金として支給を受けているが、英国政府とは一

定の距離を保持している。一方で、後援省庁である英国外務省の外務大臣は、英国の議会に対し、ブリティッシュ・カウンシルの政策、運営、業績について報告義務を負う。

## 日本における活動

日本には1953年に活動拠点を設け、1960年に調印された日英文化協定により、両国の文化交流を促進するための公的な代表機関となった。「英語」「教育」「アーツ」を三つの柱として活動を展開している。

### ●英語

ブリティッシュ・カウンシルは英語教育をリードする世界的な機関としての歴史があり、日本では、東京都内の英会話スクールにて、国際的な英語教授資格を持った講師陣が多様なクラスを担当しているほか、国内の大学や企業でも指導にあたっている。また、2014年より、文部科学省から英語指導力向上事業「英語教育推進リーダー中央研修」を委託され、各都道府県より推薦を受けた小中高等学

校の英語教員約500名（各年）の英語力および英語指導力向上を目的としたトレーニングを企画運営している。このほか、世界最大級の受験者数を有する英語運用能力評価試験IELTS（アイエルト）を始めとした各種試験も実施する。

### ●教育

英国高等教育統計局（HESA）が発表した最新統計（2013年度）によると、日本から英国への留学生の数は、2005年度以来8年ぶりに上昇した。ブリティッシュ・カウンシルでは、英国留学情報サイト「Education UK」の運営や「英国留学フェア」（春・秋）の開催などを通じて、英国留学のプロモーションに注力している。また、英国から日本への留学生も増やすべく、毎年、ロンドンにて「日本留学フェア（Experience Japan Exhibition）」を慶應義塾大学と共催している。

日英間の研究者交流も支援対象であり、英国からJSPSサマー・プログラムに参加する対象者をノミネートする推薦機関として同プログラムをサポートしてきた。近年は、大学の国際化、国際連携、博士人材育成などを支援する活動も展開している。（詳細は後述。）

### ●アーツ

アーツ部門においては、英国の文化・芸術を日本に紹介するだけでなく、創造性を通じて国際的なコラボレーションを築く様々な機会を提供している。今年4月には、英国において高齢者を対象にした先駆的な取り組みを行っている14の文化芸術団体による日本視察プログラムの一環として、国立新美術館にて開催されたフォーラム「フューチャーセッション - 高齢社会における文化芸術の可能性」に参加した。また、6月には、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、厚生労働省、独立行政法人国際交流基金、文化庁と合同で、「障害のある人の文化芸術活動と、これからの社会」と題したフォーラムを開催した。

## 大学の国際化・国際連携・人材育成に対する支援

ブリティッシュ・カウンシル（日本）の教育推進・連携部では、高等教育セクターにおいて日英の架け橋となるべく、様々な活動を行っている。ここでは、大学の国際化や国際連携、イノベーション創出のための人材育成などに関わる取り組みの一例を紹介する。

ブリティッシュ・カウンシル（日本）ウェブサイト：[www.britishcouncil.jp](http://www.britishcouncil.jp)  
 教育推進・連携部へのお問い合わせ：[ih@britishcouncil.or.jp](mailto:ih@britishcouncil.or.jp)

### ●英国大学視察訪問

日本の大学で国際関連業務に従事する職員を対象とした募集型の英国大学視察訪問プログラムは2009年より毎年度実施されており、今年11月に第7回を迎える。英国内において積極的に国際化の取り組みを展開する大学を4日間で4～5校訪問し、職員によるブリーフィングを受けるほか、関連施設の見学やネットワークワーキング・意見交換などを行う。最近では、英国の大学と交流協定（学生・研究者・職員）を締結したいという日本の大学だけでなく、英国の大学の広報・ブランディング戦略について学び、事例を参考にしたいという日本の大学からの参加者も多い。視察先の大学は、毎年、ブリティッシュ・カウンシルが公募を行い、選定しているが、日本からの視察を受け入れたいと希望する英国の大学は年々増加しており、このプログラムに対する日英双方の興味の高さがうかがえる。

### ●レピュテーション・マネージメントに関する諸活動

ブリティッシュ・カウンシルでは、日英の有識者を招いて、高等教育・研究の国際化に関する様々な課題について討論する公開シンポジウムやワークショップ

を開催し、国際的な意見交換、事例共有の機会を提供している。また、日本の大学向けに、それぞれのニーズに合わせたカスタマイズ研修やコンサルティング・サービスを提供している。

ここ数年にわたり注目を集めているトピックの一つに、大学のレピュテーション・マネージメントがある。大学が自らのブランド価値を高め、優秀な研究者や学生を集め、ひろく資金を集めるためには、レピュテーションのマネージメントが非常に重要であるとの認識が世界中で高まっており、日本でも高まりつつある。ブリティッシュ・カウンシルでは、2011年よりレピュテーション・マネージメントをテーマにしたシンポジウムの開催や日本の大学への支援活動を行ってきた。今年度は、関連プロジェクトとして、英国の大学のロンドンオリンピック・パラリンピックへの関与とそのインパクトについて考察し、日本の大学セクターと事例共有を行うことを目的としたシンポジウムの開催を予定している。

### ●RENKEI

RENKEI (Japan-UK Research and Education Network for Knowledge Economy Initiatives) は、2012年3月



RENKEI スプリング・スクール “District Energy Supply within Cities” (2015年3月)

に発足した日英の大学間連携プログラムで、現在、大阪大学、九州大学、京都大学、東北大学、名古屋大学、立命館大学、サウサンプトン大学、ニューカッスル大学、ブリストル大学、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン (UCL)、リーズ大学、リバプール大学の計12大学がメンバーとして参加している。

「社会の仕組みの変革を促す」というビジョンのもと、日英を含む世界共通の課題（グローバル・チャレンジ）に取り組むべく、若手研究者や学生向けのワークショップなどを実施してきた。今年8月にUCLで開催された2週間のワークショップ “Renaissance Entrepreneurship: Shaping a Future of Demographic Change” はその一例で、来年には会場を

大阪大学に移して同様のテーマでプログラムを展開する。ブリティッシュ・カウンシルはRENKEI発足当時より、事務局としてその活動を支えている。

### ●博士人材育成のためのプログラム

英国ではアカデミア内外で活躍できる若手研究者の能力・キャリア開発を目指す包括的なリサーチ・ディベロップメントが大学の研究・教育戦略の中核に位置付けられてきた。日本においても、文部科学省「博士課程教育リーディングプログラム」事業などを通じて、大学が、専門領域を超えてイノベーションの創出をリードする博士人材の育成に取り組んでいる背景があり、トランスファラブル・スキル・トレーニング (Transferable Skills Training) が重要視されている。

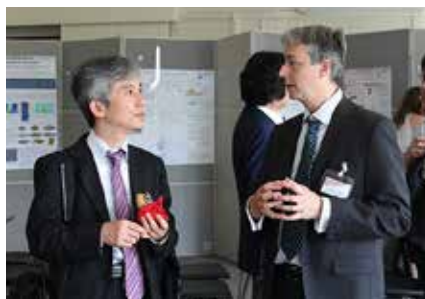
ブリティッシュ・カウンシルでは、過去数年間に渡り、この分野での支援活動に従事してきたが、直近では、今年2月に、名古屋大学が、博士人材・研究人材育成を支援する英国機関 Vitae やエジンバラ大学学術能力開発研究所などから専門家を招いて開催したシンポジウム「社会に羽ばたく博士人材の育成～英国 Vitae の経験と日本の取り組み～」の開催と運営に携わった。

## UK-Japan Silicon Nanoelectronics and Nanotechnology Symposium in Southampton (UK-Japan Si Nano<sup>2</sup>): University of Southampton



シンポジウム参加者の集合写真

2015年7月9日、10日の2日間にわたり、Southampton大学において、UK-Japan Silicon Nanoelectronics and Nanotechnology Symposium in Southamptonが開催された。本会議は、情報通信産業のみならず、環境、医療、エネルギー産業等でも中核を担い続けるシリコンナノエレクトロニクス・ナノテクノロジー分野で活躍する日英のトップ研究者が、英国随一の研究用クリーンルーム設備を有する本学に集い、議論、情報交換を通じて、この分



日英両研究者の意見交換

野での日英両国の共同研究をより活発にすることを目的として企画された。会議は、JSPS ロンドンのサポートによる4人の招待講演者に加え、日本側からさらに3人、また英国側は、Cambridge大、Oxford大などから7人、と総勢14人の招待講演者を招き、100人を超える参加者を仰ぎ、盛大に行われた。

主催の本学 Nanoelectronics and Nanotechnology 研究グループ長 Morgan 教授、および、JSPS ロンドン副所長大萱氏の開会挨拶に続き、初日の基調講演では、日本側のリーダー、東工大小田俊理教授が、エレクトロニクスに根ざした未来のスマート社会像を、とてもわかりやすく紹介された。続いて、NTTの藤原博士、Swansea大のKalna博士、英国NPLのFletcher博士、国立情報研の根本教授から、ナノスケール（髪の毛の太さの1000分の1以下）で電子1個を操る素子や、未来の量子コン

ピュータ応用に関する講演があり、昼食後には、Cambridge大のMilne教授、本学のChong博士、東工大の岩崎博士、北陸先端大のSchmidt博士から、酸化亜鉛、ダイヤモンド、グラフェン等、新しいナノエレクトロニクス材料の話題が提供された。1日目の最後のセッションでは、ImperialのDurrani博士、北陸先端大水田教授、Bristol大Pamunua博士、Oxford大Sykulska-Lawrence博士から、熱電変換、マイクロ・ナノマシン技術に関する講演がなされた。

東京農工大越田信義教授による2日目最初の基調講演では、ナノスケールに加工したシリコンによる電子線源や超音波素子など、大変興味深い応用の可能性が披露された。続いて、日立ケンブリッジのAndreev博士、本学土屋の量子情報ナノデバイスに関する講演があった。次のPechaKuchaスタイルのセッションでは、10人の当研究グループの若手研究者が、1人、20秒×20枚のスライド＝6分40秒の持ち時間で、メモリ、フォトニクス、バイオナノデバイス等のグループの多岐にわたる研究内容を紹



土屋 良重 シンポジウムオーガナイザー

介した。昼食後のポスターセッションでは、若手の研究者や修士、博士課程の学生が、招待講演者らと交流し、熱心に議論を交わしている姿が多く見られた。

多くの方々の協力により、大変内容の濃い2日間となった。1日目を講演中心とし、2日目に若手のセッション、および交流の機会を設けたのは、よいバランスであった。参加者は本学の研究者、学生を中心に若手の参加が多く、トップ研究者との交流ができるこのような機会を設けることで、将来この分野を担う若手の育成にも貢献できたことは幸いである。

最後に、すべての招待講演者および参加者の方々、特に、多大なご協力をいただいた斎藤慎一教授をはじめとする本学当研究グループ、およびZepler研究所の方々、そして、ご支援いただいたJSPSの方々、心より感謝いたします。

(土屋 良重 Lecturer, Nanoelectronics and Nanotechnology Research Group, University of Southampton)



Southampton 大学キャンパス

## JSPS London Funding Programme Information Event in June – July [1/2]

当センターでは、フェローシップ等の本会事業の広報活動の一環として、毎年、英国内の大学・研究所等において事業説明会を開催している。本年6～7月、ロンドン近郊を中心に以下10校を訪問した。そのうち、小・中規模ながらもきらりと光る特色を持った3大学を以下で紹介したい。

時期	訪問大学
6月2日	<b>University of Roehampton</b>
6月4日	University of Hertfordshire
6月15日	London South Bank University
6月16日	University of Greenwich
6月18日	<b>University of Buckingham</b>
6月23日	University of Bedfordshire
6月25日	<b>London School of Economics and Political Science (LSE)</b>
7月8日	University of Portsmouth
7月9日	University of Southampton
7月10日	University of Sussex

## University of Roehampton

## 1. ロンドン中心部に近い、緑溢れるキャンパス

6月2日、ロンドン中心部にある当センターから車でUniversity of Roehamptonに向かった。途中、みるみるうちに緑が多くなり、そしてあっという間に到着した。

同大学はロンドン中心部から公共交通機関で30分でアクセス可能な好立地に加えて、54エーカー（約66,000坪）の広大



熱心に耳を傾ける参加者

なキャンパスに自然豊かな4つのカレッジ (Digby Stuart College、Froebel College、Southlands College、Whitelands College) を有している。これはロンドンにある大学としては極めて特異的であり、世界中から人・情報が集まる大都市、落ち着いて勉学に励むことが出来る自然環境双方から大いに恩恵を受けている。

## 2. 教育に強み、新たな分野でも発展

1840年代に設立された女性教員養成カレッジ4校が統合され、2004年に現在の総合大学となった。各カレッジが掲げていた教員養成における目標や価値観を維持し、教育に力を入れており、優秀な教員を輩出してきた。Quality Assurance Agency for Higher Education（英国高等教育質保証機構）により、アカデミック・スタッフの親しみやすさと学生に対する熱心なサポートが高い評価を受けている。その一方で、新たな分野でも発展を遂げている。ダンス、歴史、人類学、英語、神学、宗教学の各分野の評価が高く、特に

ダンスは、Research Excellence Framework（英国の大学・カレッジに対する研究評価制度）2014において全英大学中第2位にランキングされた<sup>1</sup>。

大学基本情報 <sup>2</sup>	
区分	国立大学
学生数	学部生 6,140名/院生 1,215名
留学生率	9%
学部等	School of Arts, School of Business and Social Sciences, School of Education, School of Human and Life Sciences, Graduate School
キーワード	大都市にある緑溢れるキャンパス、ダンス分野で第2位、モジュラー制を採用
学術交流協定校	聖心女子大学 梅花女子大学 他

## 3. モジュラー制によりフレキシブルな履修が可能

学位は主にモジュラー制を採用している。これは各モジュール（コース）を履修し単位を取得して徐々に積み上げていく方法で、十分な単位数に達した時点で卒業する制度である。この制度によって、コース選択の幅は格段に広がり、途



Digby Stuart College キャンパス

中で方向性を変更することも可能である。単一専攻・複数専攻、フルタイム・パートタイム等の選択も可能なほか、大学学部課程、大学院課程に加えて、キャリアに直結した資格やスキルを取得するコースも充実している。

## 4. 事業説明会の様子

計25名の参加があり、多くの参加者が熱心にメモを取ったり質問したりする様子から、本会事業への関心の高さが伺えた。説明会終了後、国際交流担当者が自慢の大学構内を案内してくれた。緑で囲まれたキャンパス、歴史的な大学校舎、英国で女性に高等教育を提供した先駆者の存在等、同大学の魅力を余すことなく我々に伝えようとする姿勢から、一大学職員として見習うべきものを感じた。（岡田）

<sup>1</sup> <https://www.timeshighereducation.co.uk/sites/default/files/Attachments/2014/12/17/g/o/l/sub-14-01.pdf> のUnit35 < 2015年8月3日アクセス >

<sup>2</sup> The Times 「Good University Guide 2015」より筆者作成

## JSPS London Funding Programme Information Event in June – July [2/2]

## University of Buckingham

## 1. 英国唯一の私立大学？

英国の多くの大学は所謂国立大学であり、私立大学はバッキンガム大学を含めて僅か数校のみ。その中でも英国初（1976年創設）、そして唯一の私立大学として長くその地位を守ってきた。

ロンドンから北西へ電車・バスで約1時間半のキャンパスにはレンガ造の校舎が整然と立ち並び、青々とした芝生と木々が美しく、校内を流れる小川からはせせらぎの音が聞こえる。学生には静かで落ち着いた学習環境が用意されている。



芝生の緑と校舎の赤のコントラストが美しいキャンパス風景

## 2. わずか2年間で学士号取得！？

バッキンガム大学は最短2年の学士課程コースを提供している。日本は勿論、英国の標準的な修業年限（3年間（スコットランドは4年間））と比較してもさらに短い。これを可能ならしめているのが、夏季・冬季の長期休暇を大幅に短縮した1年間4

学期制（10週間／学期）である。学生は、学期毎に短期の休暇を挟みつつ、集中的、継続的に学習を進め、わずか2年間で学士号を取得することができる。

## 3. 全英屈指の学生満足度！

他大学に比べて学生一人当たりの教員数が多く、少人数教育を中心とした個々の学生へのきめ細かな指導に定評がある。このため、イングランド高等教育財政会議（HEFCE）が毎年実施する学生満足度調査（NSS）では常に5位以内に輝く。卒業生の就職率も極めて高く、日本以上に授業料と生活コストが高い英国において、2,000名程度の小規模校ながらも世界80ヶ国以上、学生全体の50%以上の留学生を集めるのも頷ける。政府からの財政支援を一切受けず、独立と学生第一の理念を守る誇り高さ私立大学。

大学基本情報 <sup>1</sup>	
区分	私立大学
学生数	学部生 1,305名／院生 675名
留学生率	52.4%
学部等	School of Business, School of Education, School of Humanities, School of Law, Medical School, School of Science
キーワード	2年制学士課程コース、少人数教育、高い学生満足度
学術交流協定校	創価大学、大東文化大学、桃山学院大学 他

## London School of Economics and Political Science (LSE)

## 1. 世界に伍する社会科学系研究大学！

世界に燦然と輝く社会科学系の研究型大学。THE世界大学ランキング（2014～2015）では34位（英国内5位）、同年のTHE分野別世界大学ランキング＜社会科学分野＞で11位（同3位）、QS分野別世界大学ランキングでも経済、政治・国際関係等の9分野で8位以内に輝いている。また、英国の大学研究評価（REF）2014でも、全体値で社会科学系を中心に研究の50%が世界トップレベル、37%が世界レベルという極めて高い評価を受けている。



社会科学分野で世界最大規模を誇る図書館

## 2. 世界に開かれた国際大学！？

LSEは、研究型大学として世界トップレベルの研究成果を上げる一方、世界に開かれた大学でもある。毎年、大学院を中心に、世界180ヶ国以上、100名前後の日本人を含む数千人の優秀な留学生を

受け入れている。HPには世界120ヶ国以上の各国留学生向け専用ページが設けられており、これまで35名の各国首脳等の要人を輩出してきたLSEの強かな留学生獲得戦略の一端をうかがい知ることができる。留学生獲得による学生の多様性、卒業生を中心とした強固な国際ネットワークとその好循環こそLSEの強さの秘訣と言える。なお、日本人留学生向けの専用ページ（日本語）もあるので興味がある方はご覧いただきたい。

## 3. 日本経済の研究機関？

1978年にサントリーとトヨタ自動車の共同出資で設立されたSTICARD（The Suntory and Toyota International Centres for Economics and Related Disciplines）では今日も日本経済、政治等に関する研究が行われている。

大学基本情報 <sup>1</sup>	
区分	国立大学
学生数	学部生 3,900名／院生 5,390名
留学生率	44.5%
学部等	Accounting, Economics, Economic History, Finance, Geography & Environment, Government, Law, Philosophy, Social Policy, Sociology etc.
キーワード	世界屈指の社会科学系研究大学、国際ネットワーク STICARD
学術交流協定校	東京大学経済学研究科、東北大学、一橋大学、学習院大学 他

（亀澤）

<sup>1</sup> The Times 「Good University Guide 2015」より筆者作成

## センター長のつぶやき④

竹安邦夫 ロンドン研究連絡センター長

## 独立した研究者への道

日本学術振興会は、将来の日本における独創性豊かな自立した研究者を養成することに力を注いでおります。そのためには、大学院博士課程からポストドク（博士研究員）、さらには研究室主宰者まで、いろいろなサポートプログラムを用意しています。それでは「自立した研究者」とはいったいどういった研究者なのでしょう。

## 1. Post-doctoral Researcher とは

50年も昔になりますが、日本では助手というポストはあってもポストドクというポストはありませんでした。旧帝大の大学院では5～8年で博士号を取得できましたが、地方の大学には大学院はほとんどなく、あっても博士課程は戦前からある大学（旧広島文理科大学や旧神戸商業大学など）以外にはありませんでした。したがって、博士号を取得するには、旧帝大以外では現在でいう「課程博士」ではなく「論文博士」を取得するのが一般的でした。戦後の新しい大学のほとんどで大学院が設置されたのは30～40年前です。それもほとんどが修士課程でした。

そのころでは論文で博士号を取得するには長い年月が必要でした。しかし博士号がなくても「助手」には就けたし、給料は安くても欧米のポストドクにはなれました。研究者になるための教育、人材養成が上手くいったわけです。欧米での評判は「日本人を雇えば研究ははか

どる」といったものでした。私も「日本人を誰か紹介してもらえないか」とよく頼まれました。ところが最近「日本人のポストドクはあまり働かないなあ」とか「中国人を雇うほうが経済的で効率的だよ」という声を聞くようになりました。何が変わってきたのでしょうか。

まずは、「5年で博士号を出すべし」という文科省の要求が「的を射たもの」ではなかった、ということです。現場を知らない官僚が欧米の表面だけを見て、ものを言っている典型的事例です。英国では学部を卒業して3年で博士号を取得する、米国でも学部卒業後5年で博士号を取得する、といったことは多々あります。しかし、これでは研究者としての育成には不十分であるので更なるトレーニングとしての「ポストドク」教育があるわけです。ポストドクは「教育課程のひとつ」であるわけです。今の日本にはこれ（ポストドクの教育という概念）がない。私は31歳になって論文博士号を取得し、その後16年にわたりアメリカで研究・教育生活を送りました。日本での十分な教育（訓練）を受けたことが米国で生き残れる鍵であったと感謝しています。次に、「博士号を獲れば研究職に就けるはず」という妄想があります。欧米では「大学院生からポストドク」「ポストドクからFaculty」「FacultyからTenure」と各段階で篩いにかけてられます。この篩いを通して上のポジションにつくわけです。篩いで除かれればそれでアカデミックな研究職には就けません。スポーツ界、芸術界、

産業界、その他すべての世界には「篩い」があります。この「篩いのシステム」が日本、特に「研究の世界」では非常に曖昧です。「競争して上に行ける」というシステムがなければ若い研究者は意欲を持ってません。

博士号を持った優秀な人材を養成するには「手間ひまが非常にかかる」。単に知識と技術を教えればよい、というわけではないのです。「博士号取得者を安易に輩出し、ポストドクポジションを増やし、さらには留学後のポジションを与える」というような施策では、優秀な研究者は育つわけはなく、将来の「日本の智の根幹」はなくなるでしょう。

## 2. Faculty ポジションを得るためには

さて、アカデミックな研究を続けるためには大学でFacultyの一員になることが重要です。欧米のこの過程での「篩い」は重要で厳しいものです。ポストドクのほとんどが通り抜けねばならない関所のようなものです。ポストドク時代に習得した技術知識をさらに発展させた「自分独自の今後の研究計画」、すなわち「新しいアイデア」を売りに行くわけです。この新しいアイデアに基づく研究計画次第でポストが得られるわけです。ポストドクのテーマの単なる延長ではポストは得られません。自分が独立したからといって、アドバイザーと競争したら負けるに決まっています。

したがってポストドクを雇っているアドバイザーの役目は非常に重要になりま

す。ポストドクを技術員として使うなんてことは最低です。ポストドクに新しいチャレンジ、チャンスを与え、上手くいけばその技術、データを持って外に出ていく援助をする、という役割です。自分の興味を自由に伸ばさせてくれるアドバイザーを探すことは非常に重要です。

ポストドク制度が日本に生まれたのは10～20年前です。この短い歴史のなかで、アドバイザーの役割を十分に理解し果たしている研究者は非常に少ないのが現状です。ですから、「日本でポストドクをやる」ことは悲惨な結果につながりかねません。十分にアドバイザーを吟味してかからねばなりません。欧米でも同じことですが、一つ大きな違いは、自国人のポストドクを雇えば、将来のテーマからポストまで面倒を見ないといけません。一方、日本人のポストドクを雇えば、あとくされがない。彼らは、日本人ポストドクは「お客さん」としてみている場合が多いことです。技術員の扱いをしても、どこか有名な雑誌に論文を書いてやれば、喜んで日本に帰る、というわけです。研究室のテーマを日本に持って帰らせても、自分（アドバイザー）は勝てる、という自身があります。欧米から持ち帰ったテーマにはトップダウン型の大型研究費がよく当たります。こういうことでは日本のサイエンスは欧米には勝てません。

すなわち、ポストドクとは、Faculty ポジションを得るための一つ手前の準備段階なのです。Faculty ポジションにいる研究者とは、自分のアイデアで、自分で研究

費を獲得し、自分で研究も教育も社会奉仕もやるものなのです。独自性・自立性がなければ継続不可能なポジションにいるわけです。そのための教育をうけるのがポストドクなのです。ですから、ポストドクを数年やったのちに、どこかの国立研究所の従属研究者になる、などは無意味です。門戸は世界に開かれています。

### 3. 独立した自由な研究者とは

30年ほど前、日本では「教授、助教授、助手という大学のヒエラルキーが諸悪の根源である」という意見がマスコミをはじめいろいろな公共の場でまかり通りました。「助手をしては自由な研究ができない」などと訴える若手研究者も数多くいました。こういった若手研究者は欧米に「留学」し、帰国後は「向こうは良かった」と言いました。実は多くの場合、言葉の不自由さもあって、技術屋としてこき使われるが新鮮で、自分が奴隷のごとく扱われていることには気がついていないのです。おまけに多くの場合、論文はボスが書いてくれる。「自分は自由だ」と

の幻想に取りつかれているだけでした。

これは間違った考え方で、私に言わせれば、良い教授に恵まれれば、日本では「教授が大きな研究費を取ってきてくれる。大型機器もそろえてくれる。助手はアイデアさえあれば何でも自由にできる」、まるで天国です。アイデアさえあれば、そして実行力さえあれば、私の知る限りでも、長年助手あるいは教務職員を務める傍ら素晴らしい研究成果をあげ、世界のトップレベルの大学の教授になられた先生が多数おられます。

今は世界中どこでも、税金は一見成果が見えたと感じられる社会保障や医療などに使われ、成果や出口の見えにくい基礎科学にはまわってこない。こういった現状で、自分で独立して研究費を獲得せねばならず、スプーンフィード的な教育義務を数多く背負わされる。その上、社会奉仕にも貢献しなければアカデミック界では独立研究者とは見なされない。これをこなしていく中で、将来を担う人材を養成することの重要さと難さを自覚して生きる人材こそが「独立した研究者」

ということになるのでしょう。困難さはありますが、そこには「研究の自由」というものもあります（かつては確実にありました、今後もあってほしい）。

一方、教育義務から解放される唯一の場合は、かつては研究所でありました。研究所の目的というものは当然ありますが、結構自由もありました。しかし、今日、研究所も大学院生を採りたい、すなわち、大学院教育もしたい、という風潮が出現し、話がややこしくなってきました。これは本末転倒です。そもそも研究所の研究者は研究にまい進するべきです。お上からは「こういったテーマで研究をなささい」「50年後ではなく2～3年以内に目に見える成果を出しなさい」と突かれます。そこには税金で賄われるお金があります。納税者を納得させるために盛んに「イノベーション」という言葉が使われる（そもそも予め出口・成果が見えているようなものにイノベーションという言葉は使うことはできませんが）。こういった環境では、次世代の独創性豊かな、自立した研究者を育てることはできません。

結局のところ、「独立した自由な研究者」とは現在の悲惨な状況を乗り越えて、研究費を独自に獲得し、研究・教育・社会奉仕にまい進できる者ということでしょう。こういった人材は「単に教えて」育成できるものではありません。教育学の原理、すなわち「教育される者の意欲」と「教育する者の熱意」が噛み合ったところに真の人材養成があるのではないのでしょうか。大学に入学してから、技術・知識を教えて「意欲」を身につけさせることはできません。競馬の競走馬でも「放牧」で英気を養うことは常にあることです。ここでの「自由」を如何に活用するか、という自問自答を通して「自助努力の精神」を身に付けた人が、将来の日本を背負って立つ人材になるのではないのでしょうか。

最後に、海外に出て自立した研究者として活躍中の、特に在英日本人研究者の方々の一部をご紹介します。元気にさせられます。これらの先生方には、日本からの短期・長期の留学生（大学院生・ポストドクも含めて）は積極的に受け入れてもらえます。

## 「日本人研究者の受入れに熱心な英国の大学に所属する日本人研究者」リストの公開

当センターにおいて、更なる日英の学術交流の促進を目指すためには、英国の大学・研究機関で根を下ろしてご活躍されているPIレベルの日本人研究者のご協

力も、非常に大事である考えております。そこで、今回、当センターが主催する英国における日本人研究者ネットワーク「在英日本人研究者会」にご参加されている

研究者のうち、日本からの研究者を受入れ可能と積極的に表明されている先生方のリストを公開させていただきます。英国において研究を行いたいと希望をお持ちの

研究者は、下記の連絡先（Eメール）を通じて直接お問い合わせください。新たな学術交流が生まれることを期待しています。（松本）

Name	Position	Department	University/Institution	Research Fields	Email Address	Comments from PI Researchers
Dr Matsuura Mikako	Lecturer and STFC Ernest Rutherford Fellow	Physics and Astronomy	Cardiff University	Observational Astronomy	<a href="mailto:matsuuram@cardiff.ac.uk">matsuuram@cardiff.ac.uk</a>	観測から天文学を解き明かす研究をしています。星、近傍銀河のダスト、分子に興味があるかた歓迎します。
Dr Nishino Takafumi	Lecturer	Centre for Offshore Renewable Energy Engineering	Cranfield University	流体力学、再生可能エネルギー	<a href="mailto:t.nishino@cranfield.ac.uk">t.nishino@cranfield.ac.uk</a>	国籍や年齢を問わず、流体力学分野の研究者との交流を積極的に行っています。もし興味がありましたら、まずはメールでご連絡ください。
Dr Tanaka Reiko	Lecturer	Bioengineering	Imperial College London	Systems medicine, mathematical modelling	<a href="mailto:r.tanaka@imperial.ac.uk">r.tanaka@imperial.ac.uk</a>	Multidisciplinary research にとても適した環境です。



Name	Position	Department	University/Institution	Research Fields	Email Address	Comments from PI Researchers
Dr Ono Masahiro	Senior Lecturer/ Senior Research Fellow	Life Sciences	Imperial College London	Immunology	<a href="mailto:m.ono@imperial.ac.uk">m.ono@imperial.ac.uk</a>	
Prof Takata Masao	Magill Chair in Anaesthetics & Head of Section	Section of Anaesthetics, Pain Medicine & Intensive Care	Imperial College London	麻酔集中治療、acute lung injury research	<a href="mailto:m.takata@imperial.ac.uk">m.takata@imperial.ac.uk</a>	
Prof Otsu Kinya	Professor and BHF Chair of Cardiology	Cardiovascular Division	King's College London	心不全、細胞死、慢性炎症、ミトコンドリア代謝	<a href="mailto:kinya.otsu@kcl.ac.uk">kinya.otsu@kcl.ac.uk</a>	ポストドク希望の方はご連絡ください。
Dr Hayashi Mayumi	Research Fellow	Institute of Gerontology, Department of Social Science, Medicine and Health	King's College London	日英高齢者ケア政策比較	<a href="mailto:mayumi.1.hayashi@kcl.ac.uk">mayumi.1.hayashi@kcl.ac.uk</a>	老年学、高齢社会における諸問題（イギリス、世界の医療、介護、年金等）専門の研究者の受入れをしています。書類審査有。
Prof Shiono Koji	Professor	Civil and Building Engineering	Loughborough University	Hydrodynamics	<a href="mailto:K.Shiono@lboro.ac.uk">K.Shiono@lboro.ac.uk</a>	EPSRC 研究費のポストドク広告を日本土木学界誌に載せて頂きましたが誰も応募してきませんでした。
Dr Yamazaki Hiro	Senior Lecturer	Geography, Politics & Sociology	Newcastle University	地球と惑星の大気海洋科学および気候変動	<a href="mailto:hiro.yamazaki@ncl.ac.uk">hiro.yamazaki@ncl.ac.uk</a>	専門は大気・海洋の流体力と数値モデリングですが、気候変動に関しては人文地理的な面まで広く興味を持っています。ホームページは英語ですが、メールなどは日本語でも構いませんのでお気軽にどうぞ。 <a href="http://www.ncl.ac.uk/gps/staff/profile/hiro.yamazaki">http://www.ncl.ac.uk/gps/staff/profile/hiro.yamazaki</a>
Dr Nagase Yoko	Programme Lead for Economics	Accounting, Finance and Economics	Oxford Brookes University	Economics	<a href="mailto:ynagase@brookes.ac.uk">ynagase@brookes.ac.uk</a>	
Dr Oyama Shinji	Lecturer	Department of Film, Media and Cultural Studies	Birkbeck College, University of London	Media and Cultural Studies	<a href="mailto:s.oyama@bbk.ac.uk">s.oyama@bbk.ac.uk</a>	ほぼ毎年日本からの在外研究者を受け入れてきました。日本研究のプログラムがありますので、セミナーや講義も担当してもらって来ました。
Prof Suzuki Ken	Professor	William Harvey Research Institute	Queen Mary University of London	stem cell therapy, cardiac surgery, myocardial repair and regeneration, 心不全	<a href="mailto:ken.suzuki@qmul.ac.uk">ken.suzuki@qmul.ac.uk</a>	大阪大学出身、在英 17 年の academic cardiac surgeon のラボです。これまでに約 20 名の日本人 post-doc, research fellow, 大学院生を受け入れてきました。 <a href="http://www.whri.qmul.ac.uk/">http://www.whri.qmul.ac.uk/</a> を参照ください。
Dr Kobori Osamu	Lecturer	Psychology	Swansea University	Cognitive Behavioural Therapy	<a href="mailto:O.Kobori@swansea.ac.uk">O.Kobori@swansea.ac.uk</a>	ロンドンから乗り換えなし、世界で 2 番目に海に近いキャンパス、小さな日本人コミュニティあり！
Prof Suzuki Toru	Chair of Cardiovascular Medicine	Cardiovascular Sciences	University of Leicester	循環器内科学	<a href="mailto:ts263@le.ac.uk">ts263@le.ac.uk</a>	
Dr Kinoshita Hajime	Lecturer	Materials Science & Engineering	University of Sheffield	放射性廃棄物の処理・処分、熱力学モデル、セメント化学、CO <sub>2</sub> 固定化	<a href="mailto:h.kinoshita@sheffield.ac.uk">h.kinoshita@sheffield.ac.uk</a>	残念ながらこちらからの経済的な援助は難しいですが、日本とは異なった環境での研究に興味のある方はご連絡ください。学ぶことは多いはず。こちらにとっても、日本の方は細部にまで気を配った研究が出来るので、一緒に研究をしましいます。
Dr Fujiyama Taku	Senior Lecturer	Civil Engineering	University College London	交通計画、交通工学	<a href="mailto:taku.fujiyama@ucl.ac.uk">taku.fujiyama@ucl.ac.uk</a>	自転車、港湾、鉄道、インフラシステムなど幅広く研究しております。博士課程学生、研究員、教員の方を受け入れています。
Dr Kawata Daisuke	Reader in Astronomy	Space & Climate Physics (Mullard Space Science Laboratory, MSSL)	University College London	天文学	<a href="mailto:d.kawata@ucl.ac.uk">d.kawata@ucl.ac.uk</a>	MSSL は英国南部の美しい田舎にある UCL 所属の天文学宇宙科学の研究所です。短期訪問、PhD 取得、ポストドク、共同研究滞在、なんでも大歓迎ですので、お気軽にご連絡ください。
Dr Tokieda Tadashi	Director of Studies in Mathematics		Trinity Hall, University of Cambridge	数学、物理	<a href="mailto:tokieda@dpms.cam.ac.uk">tokieda@dpms.cam.ac.uk</a>	研究者の雇用の意味での受け入れはしていませんが、ケンブリッジに長期滞在される日本の研究者の方は連絡していただければ、いろいろ案内したり相談のつたりしましょう。
Dr Iida Fumiya	Lecturer	Engineering	University of Cambridge	Robotics	<a href="mailto:fi224@cam.ac.uk">fi224@cam.ac.uk</a>	ロボット工学を中心に生物学や材料科学まで含めた学際分野の研究に従事しています。共同研究を活発に行っているため興味のある方はご連絡ください。 <a href="http://divf.eng.cam.ac.uk/birl/">http://divf.eng.cam.ac.uk/birl/</a>
Prof Soga Kenichi	Professor of Civil Engineering	Department of Engineering	University of Cambridge	土木工学	<a href="mailto:ks207@cam.ac.uk">ks207@cam.ac.uk</a>	土木インフラのモニタリングとそのアセスメントおよび地盤工学に関する研究を行っております。
Dr Kimata Yuu	group leader	Department of Genetics	University of Cambridge	生命科学	<a href="mailto:yk299@cam.ac.uk">yk299@cam.ac.uk</a>	やる気のある日本人研究者の方大歓迎です。いつでもご連絡ください。
Prof Tanaka Tomoyuki	Professor, Wellcome Trust Principal Research Fellow	Centre for Gene Regulation and Expression	University of Dundee	染色体分配の分子機構	<a href="mailto:t.tanaka@dundee.ac.uk">t.tanaka@dundee.ac.uk</a>	我々のグループは、細胞分裂に際し遺伝情報を正確に娘細胞に伝えるための分子メカニズムを研究しています。
Dr Iwata Tomoko	Senior Lecturer	School of Medicine	University of Glasgow	Cancer Research	<a href="mailto:Tomoko.Iwata@glasgow.ac.uk">Tomoko.Iwata@glasgow.ac.uk</a>	スコットランドで一番大きく最新（2015 開設）の大学病院内の研究室です。スコットランドの自然の中、人が好く活気のあるグラスゴーで、思いっきり研究をしたい方、是非ご連絡ください。

Name	Position	Department	University/Institution	Research Fields	Email Address	Comments from PI Researchers
Dr Kobayashi Chiaki	Senior Lecturer	School of Physics, Astronomy and Mathematics	University of Hertfordshire	Astronomy	<a href="mailto:c.kobayashi@herts.ac.uk">c.kobayashi@herts.ac.uk</a>	理論天文学、銀河の化学進化が専門です。PhD 学生またはポストドクの、国内外のグラント応募のサポートします（とくに女性）。当研究所には内部選考がありますので、早めに準備を始めてください。詳細は： <a href="http://www.herts.ac.uk/research/stri/research-areas/car/fellowships">http://www.herts.ac.uk/research/stri/research-areas/car/fellowships</a>
Dr Sasaki Satoshi	Lecturer	Physics and Astronomy	University of Leeds	Condensed Matter physics	<a href="mailto:s.sasaki@leeds.ac.uk">s.sasaki@leeds.ac.uk</a>	当研究室は、トポロジカル絶縁体・超伝導体を使ったスピントロニクスの実験研究を行っていますが、同じ department にある理論グループと緊密に連携していますので、実験でも理論でもどちらも興味がある方も歓迎致します。研究に没頭できる環境が整っていますし、30 人近い優秀な学生・ポストドク達と交流も将来の研究に活きると思います。
Dr Terunuma Miho	Lecturer	Cell Physiology and Pharmacology	University of Leicester	神経科学、生化学	<a href="mailto:mt304@le.ac.uk">mt304@le.ac.uk</a>	海外で研究をしてみると視野が広がります。学部生、院生問わず学生と教員との距離が非常に近いのがイギリスの良いところだと思います。
Dr Suzuki Ryo	Marie-Curie Intra-European Fellow	Mathematical Institute	University of Oxford	物理（素粒子理論）	<a href="mailto:Ryo.Suzuki@maths.ox.ac.uk">Ryo.Suzuki@maths.ox.ac.uk</a>	
Dr Akiyoshi Bungo	Group leader	Department of Biochemistry	University of Oxford	Cell biology	<a href="mailto:bungo.akiyoshi@bioch.ox.ac.uk">bungo.akiyoshi@bioch.ox.ac.uk</a>	気合いのある人を歓迎します。
Dr Koyama Kazuya	Reader	Institute of Cosmology and Gravitation	University of Portsmouth	宇宙論	<a href="mailto:Kazuya.Koyama@port.ac.uk">Kazuya.Koyama@port.ac.uk</a>	当研究室では学振研究員などの日本人研究者を積極的に受け入れています。日本の大学との交流も積極的に行っており、2010 年には京都大学との研究交流に対して、Daiwa Adrian Prize を受賞しました。また研究室は現在、2つの European Research Council のグラントを保持しています（PI: Koyama and Percival）。今年より ERC と JSPS の取り決めにより、学振研究員の身分を保持したまま、ERC grant のチームメンバーに加わることが可能になりました。興味のある方は小山まで遠慮なくご連絡ください。
Prof Saito Shinichi	Professor	Nanoelectronics and Nanotechnology Research Group, Electronics and Computer Science, Faculty of Physical Sciences and Engineering	University of Southampton	Nanoelectronics	<a href="mailto:s.saito@soton.ac.uk">s.saito@soton.ac.uk</a>	物理に立脚した半導体微細加工技術で世界にインパクトを与えたい研究者を随時募集しています。
Dr Kanai Ryota	Reader	School of Psychology	University of Sussex	Cognitive Neuroscience	<a href="mailto:kanair@gmail.com">kanair@gmail.com</a>	
Dr Asally Munehiro	Assistant Professor	School of Life Sciences	University of Warwick	Systems & Synthetic Biology	<a href="mailto:m.asally@warwick.ac.uk">m.asally@warwick.ac.uk</a>	2014 年 9 月に発足した新しい研究室です。経時観察、数学モデル、分子生物学的手法を用いて、枯草菌のバイオフィル形成、細胞分化を研究室の中心的研究テーマとしています。 研究室 HP： <a href="http://homepages.warwick.ac.uk/staff/M.Asally/index.html">http://homepages.warwick.ac.uk/staff/M.Asally/index.html</a>
Prof Hirohata Atsufumi	Professor	Electronics	University of York	スピントロニクス、磁性材料・素子	<a href="mailto:atsufumi.hirohata@york.ac.uk">atsufumi.hirohata@york.ac.uk</a>	我々の研究室では 1 年を通して多くの留学生をお迎えています。日本に限らずルーマニア・ドイツ・フランス・香港などからの学生さんと（もちろんイギリスの学生さんとも）交流しながら研究が進められます。詳しくは、HP をご覧ください： <a href="http://www-users.york.ac.uk/~ah566/">http://www-users.york.ac.uk/~ah566/</a>
Dr Ito Tatsuya	Visiting Fellow in Research Integrity	Research and Enterprise Development	University of Bristol	Research Integrity, Research Governance, Clinical Trial	<a href="mailto:tatsuya.ito@bristol.ac.uk">tatsuya.ito@bristol.ac.uk</a>	私はブリストル大学で Research Integrity について研究しています。多くのことを学び、日本における Research Integrity に貢献できればと思っています。
Dr Perry Anthony	Reader	Biology and Biochemistry	University of Bath	Molecular Embryology	<a href="mailto:perry135@aol.com">perry135@aol.com</a>	我々の研究室では、マウスをモデル動物とし、マイクロマニピュレーション、分子生物学、細胞生物学、および胚発生学の総合的アプローチにて、受精直後の配偶子-胚変遷についての研究を行っています。本研究室のテーマに、興味と意欲を持って哺乳類初期発生についての研究を共に行いたいと希望する日本人ポストドク等の方を歓迎致します。
Dr Homei Aya	Lecturer	East Asian Studies	University of Manchester	医史学・科学技術史	<a href="mailto:aya.homei@manchester.ac.uk">aya.homei@manchester.ac.uk</a>	イギリスで東アジアの医史学・科学技術史の講座を持つ大学は二つしかありませんがマンチェスター大学はその一つです。マンチェスターの街も音楽や文化にあふれた素晴らしい街です。興味のある方は是非いつでもご連絡ください。お待ちしております。
Prof Mizuta Hiroshi	Professor	Nanoelectronics and Nanotechnologies Research Group, Faculty of Physical Sciences and Engineering	University of Southampton	Nanoelectronics	<a href="mailto:hm2@ecs.soton.ac.uk">hm2@ecs.soton.ac.uk</a>	現在は日本の JAIST を本務としておりますので、サウサンプトン大学での受け入れは控えておりますが、必要に応じて相談に乗りますので、興味のある方はご連絡ください。
Dr Tsuchiya Yoshishige	Lecturer	Nanoelectronics and Nanotechnology Group, Faculty of Physical Sciences and Engineering	University of Southampton	Nanoelectronics, Nano-electromechanical-systems (NEMS)	<a href="mailto:yt2@ecs.soton.ac.uk">yt2@ecs.soton.ac.uk</a>	日本からの研究者の受け入れ等、日英交流に大変興味があります。条件等、どうぞお問い合わせください。

## 世界大学ランキングといかに向き合うか【1/4】

### Point

- ・ 世界大学ランキングへの注目が一層増している
- ・ ランキングの意味と特性を理解し、ランキング自体を目的化しないことが重要
- ・ 制度型評価の充実や国際的枠組づくりも望まれる

### Introduction

2015年6月18日、英高等教育専門誌 Times Higher Education (THE) は、本年の「アジア大学ランキング」を発表した<sup>1</sup>。結果は、東京大学が3年連続首位を堅持したものの、100位以内の日本の大学は20大学から19大学へと数を減らし、18大学から21大学へと数を伸ばした中国に抜かれて、日本は国別首位の座から後退した。

近年、我が国では世界大学ランキングへの注目が一層増している。『日本再興戦略2013』とそれに続く『国立大学改革プラン』では、10年以内に世界大学ランキングトップ100位以内に入る日本の大学10校以上を入れるという「数値目標」が登場した。その目標達成に向け、2014年度から文部科学省において「スーパーグローバル大学創成支援」事業が始まった。トップ型に採択された13大学はランキング100位以内を目指すと言われている。大学側でも、京都大学や広島

大学をはじめ、世界大学ランキングでの地位向上を自大学の国際戦略の中に掲げるところが増えてきた<sup>2</sup>。

現在、英国では様々な形の世界大学ランキングが実施されている。本センターでも、以前からそれぞれの発表時期には、関係機関に速報として情報提供してきたところである。

後述するように世界大学ランキングへの批判は根強いが、今日の世界の高等教育界において、その影響力は無視できないものとなっている。

本稿では、世界大学ランキングをどのように捉え、これに向き合ったらよいか、あらためて考えてみたい。

### Who need it?

グローバル化に伴い、世界の大学への留学生数は増加傾向にある。英国の留学生受入数は2004年度の約35万人から2013年度の約43万人へと10年間で20%以上の伸びを見せた<sup>3</sup>。

留学生が大学を選択する際、参考とするのが定評のある世界大学ランキングである。国内の大学であれば、長年かけて築かれてきた各大学のイメージや評価、大学間の自然発生的なヒエラルキーというべきものがあり、選択する側も容易にこれらの情報を入手することができる。また、近年各国で整備されてきた公的機関による大学評価も学生に対して判断材料を提供することができる。しかし、異なる歴史・文化・制度の下にある外国の大学同士を比較することは、個人レベルでは難しい。

世界大学ランキングが現れる以前には、外国の大学に留学する学生は一握りで、その目的も、特定の研究者の下で研究することと、比較的明確であった。しかし、国際的な人材の流動化が進んだ現在では、様々なレベルの学生が早期に外国の大学で学ぶ機会が増えており、その目的も多様化している。さらに、外国留学の場合、国内の大学進学と比較して、時間的・金銭的に多大なコストがかかる。このような状況の下、留学先に関して一貫性のある分かりやすい情報が求められている。世界大学ランキングが必要とされる理由がここにある。

一方、大学側でも、一律にランク付けされることに對し不満を抱きつつも、ランキングを利用してきた面がある。自大学が上位にランクインすれば、HP等で宣伝しない大学はない。こうした大学の行動がランキングの普及と社会的信用の向上に一役買ってきたことは否めない。

また、近年、外国の大学との間で、交流協定の締結および共同大学院やジョイント・ディグリーの創設という形の協力を実施することが盛んであるが、協力相手として世界大学ランキング上位の大学が選ばれる傾向がある。逆に言えば、ランキングの上位に位置していないと、大学にとって望む相手との国際協力は難しくなるということだ。実際にインドでは、2012年以降、国内の大学とジョイント・ディグリーなどの共同プロジェクトで協力を行うことができる外国の大学を「THE世界大学ランキング」（以下、THE-WUR）または上海交通大学の「世界学術ランキング」で500位以内に入る大学に限っている<sup>4</sup>。このような政府方針も大学関係者に世界大学ランキングを意識させる大きな要因となっている。

### What is it?

では、現在世界的に流通している世界大学ランキングにはどのような問題があるのか。ここでは『日本再興戦略』が依拠している<sup>5</sup> THE-WURを例に整理してみる。

THE-WURは、英高等教育専門誌 Times Higher Education (THE) が2004年から毎年作成している、世界で最も影響力のある世界大学ランキングの一つである。米国に本社を置く国際的な情報企業 Thomson Reuters から提供された情報を元にしている（なお、2015年版からは、社内に設置した専門部署で収集・分析された独自データおよび Elsevier 社のデー

<sup>1</sup> <https://www.timeshighereducation.co.uk/world-university-rankings/2014-15/regional-ranking/region/asia>

<sup>2</sup> [www.kyoto-u.ac.jp/ia/international/plan/home.hiroshima-u.ac.jp/kohog/kokusai/strategy.html](http://www.kyoto-u.ac.jp/ia/international/plan/home.hiroshima-u.ac.jp/kohog/kokusai/strategy.html)

<sup>3</sup> [https://www.hesa.ac.uk/index.php?option=com\\_pubs&Itemid=&task=show\\_year&pubId=1&versionId=25&yearId=312](https://www.hesa.ac.uk/index.php?option=com_pubs&Itemid=&task=show_year&pubId=1&versionId=25&yearId=312)  
ただし、近年の移民抑制策の影響で、今後留学生受入数は減少すると予想されている。

<sup>4</sup> <https://www.insidehighered.com/news/2012/06/05/indian-government-sets-rules-dual-degrees-foreign-universities>

<sup>5</sup> 『日本再興戦略』改訂2014] p51 「1つの指標として Times Higher Education 誌 “World University Ranking 2013 – 2014 (2013年10月公表) では、日本の大学5校 (トップ200位以内) のうち4校が昨年より順位を上げた。」

(<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/pdf/honbunJP.pdf>)

## 世界大学ランキングといかに向き合うか【2/4】

データベースである Scopus を使用すると発表があった<sup>6)</sup>。同ランキングの評価基準は以下のように、5つのカテゴリーに大別される13の指標から成っている(【 】内はウェイト)。

### ① 教育【30%】

評判調査 (reputation survey)【15%】、教員1人当たりの学生数【4.5%】、PhD授与数/学士号授与数比【2.25%】、教員1人当たりのPhD授与数【6%】、教員1人当たりの大学全体の収入【2.25%】

### ② 研究【30%】

評判調査【18%】、教員1人当たりの研究費獲得額【6%】、教員・研究者1人当たりの論文数【6%】

### ③ 論文被引用数 (Citations)【30%】

研究の影響力 (論文1本当たりの平均被引用回数)

### ④ 国際性【7.5%】

留学生/国内学生比、外国人教員/国内出身教員比、国際共著論文数【各2.5%】

### ⑤ 産業界からの収入【2.5%】

教員1人当たりの産業界からの収入

THE-WURの妥当性には以前から多くの指摘がなされている。大別すると、(1)元データに関するもの(2)各指標に関するもの(3)各指標のウェイトに関するものがある。

(1)について、THE-WURへの代表的な批判として、英語圏の大学に有利というものがある。これは Reuters 社が収集

した元データが英語論文に偏っていると、いう事実に基づく。

(2)は、評価基準の各指標が本当に大学の實力を正しく反映しているのかという疑問から来る。また、各指標を意図的に操作することが可能であるという指摘もある。例えば、国際性の指標である留学生比率は、長期休暇などを利用して短期間に大量の外国人学生を受け入れることで容易に改善することができる。そのような目的でサマー・プログラムを組んでいる大学があるというのはよく聞く話である。

(3)について、これは THE-WURに限ったことではないが、そもそも各指標のウェイト付けが恣意的だという意見がある。THE-WURでは、教育と研究に各30%、国際性に7.5%のウェイトを置いているが、どの指標にどれだけのウェイトを配分するのが適切であるか、合理的に説明することはできないだろう。

ランキングを作成する側もこのような批判があり得ることは承知しており、THE誌では頻繁に、データ範囲の変更や評価基準の改定を行っている。

例えば、2010年度のTHE-WURでは、これまで500位以内にも入ったことのなかったエジプトのアレクサンドリア大学が、突然147位に躍進し、研究力評価や論文被引用数で、ハーバード大学やスタンフォード大学といった名門校を上回るという出来事があった。これは、同大学の数学の一教授が、自らの論文から

繰り返し引用を行い、友人にも自論文からの引用を依頼していた結果である<sup>7)</sup>。相対的に発表論文数の少ない大学では1本の論文からの引用回数が全体の平均被引用回数に大きく影響することから生じた事態であった。THE誌ではこの出来事を受けて、翌年度のランキングから、発表論文数が200未満の大学は原則ランキングの対象としないとする方針変更を行った。

評価基準の改定に関しては、開始当初50%を占めていた評判調査のウェイトが徐々に減じて、現在では33%となっている。また、指標の入れ替えも度々行っており、例えば、開始時にあった「卒業生の被雇用率」の指標が、QS社との提携関係を解消した2010年版以降姿を消す一方で、2011年版から国際性のカテゴリーに国際共著論文数の指標が加わった。

こうしたランキング作成者の努力により、元データの正確性や評価基準の精密性は確実に向上していこう。しかし、何らかの数量的指標に基づいて評価が行われる以上、特定の指標に特化して改善を行うことは可能であるし、効率的でもある。そして、ランキングの影響力が大きくなればなるほど、このような操作的手法へのインセンティブは大きくなる。

また、いくら元データや評価基準に関して改善がなされたとしても、(3)のような、ランキングにまつわる本質的な恣意性は依然として残る。

## How can we improve it?

世界的に影響力を増す世界大学ランキングに対して、関係者はどのような対応を取り得るのか。欧米の大学ではしばしばランキング作成者に対して、評価基準の改善を求めたり、自大学の情報を積極的に提供する例が見られる。日本でも2011年に、主要な研究型大学11校で構成する大学連合体であるRU (Research University) 11が、THE誌に対し、THE-WURの評価基準の改訂を求める声明を発表するという出来事があった<sup>8)</sup>。これは、Citationsの指標に注目し、特に Thomson Reutersの「地域補正」の手法が日本の大学に不利な結果をもたらしていることを指摘したものである。こうした評価される側の客観的論拠に基づいた批判はランキングの質の向上に資するところが多いと考える。

世界大学ランキングが各国の制度の違いを顧慮せず実施されている現状に何らかの国際的基準を設けようという試みもなされてきた。既に2006年には、国際ランキング専門家グループ (IREG)<sup>9)</sup>により、「高等教育機関のランキングに関するベルリン原則 (以下、ベルリン原則)」が策定されている<sup>10)</sup>。これは大学ランキングの目的・手法・結果の公表について国際的指針を与えるものである。この原則によれば「ランキングは、高等教育について比較可能な情報を与え、その理解を高めるが、高等教育がどのようなもの

<sup>7)</sup> [www.nytimes.com/2013/04/14/education/edlife/university-rankings-go-global.html?pagewanted=all&r=3&](http://www.nytimes.com/2013/04/14/education/edlife/university-rankings-go-global.html?pagewanted=all&r=3&)

<sup>8)</sup> [current.ndl.go.jp/node/18978](http://current.ndl.go.jp/node/18978)

<sup>9)</sup> 2002年にユネスコ・ヨーロッパ高等教育センターにより開催された、大学ランキングに関する国際会議に参加した専門家を中心に結成された非営利国際組織。(<http://ireg-observatory.org/en/>)

<sup>10)</sup> [www.che.de/downloads/Berlin\\_Principles\\_IREG\\_534.pdf](http://www.che.de/downloads/Berlin_Principles_IREG_534.pdf)

<sup>6)</sup> [www.timeshighereducation.co.uk/news/times-higher-education-announces-reforms-to-its-world-university-rankings/2017071.article](http://www.timeshighereducation.co.uk/news/times-higher-education-announces-reforms-to-its-world-university-rankings/2017071.article)

## 世界大学ランキングといかに向き合うか【3/4】

であり、何をなすべきかを定める主要な方法となるべきではない」とされる。つまり、ランキングはそれ自体が目的ではなく、その国（地域）の高等教育の目的に依存するということである。また、同原則では「特に国際ランキングは、偏向の可能性を意識し、その目的を明確にすべきである」とも言われている。

また、2012年にはIREGにより、大学ランキング自体を審査する仕組みである「IREG ランキング審査 (IREG Ranking Audit)」が開始された<sup>11</sup>。これはIREGが、申請に基づき、既存の大学ランキングを審査して認証を与える仕組みである。その根底にあるのは「質保証の基準をランキングのプロセス自体に適用すること。ランキングのプロセスは高等教育機関を評価するために適用される専門技術に着目し、ランキング自体を評価するためにこの知識を用いるべきである」というベルリン原則の理念の実践であると思われる。

IREGの試みは市場の需要に牽引される既存の大学ランキングに対抗して新たなランキングを提供するものではないが、大学ランキング自体に質保証を求めたものとして大きな意義がある。IREGの基準を満たしたランキングの中から、新たに代表的な世界大学ランキングが登場する日も遠くないかもしれない。

### 市場型評価と制度型評価<sup>12</sup>

主に出版社などにより市場の需要に応える形で実施されている現在の世界大学ランキングを相対化するためには、公的

機関が実施する既存の制度型評価との比較も有効である。制度型評価はその性質上、国内の大学のみを対象としていることがほとんどであるものの、一般にTHE-WURなどの市場型評価と比べて、遥かに大きな労力と時間をかけて実施されてお

り<sup>13</sup>、精密性という点で優っている。

下の表1は、2014年版THE-WURの上位から英国の大学を抜き出したものと、英国の制度型評価である研究評価制度 Research Excellence Framework (REF)<sup>14</sup>で上位の評価を得た大学を並べ

た表である。研究についての評価を比較するために、THE-WURの方は、研究面に関するカテゴリーである「研究」「論文被引用数」において各大学が獲得したポイントの単純平均（両カテゴリーは同じ30%のウェイトを占めている）に従って

(表1) THE-WUR2014-2015 / REF2014 結果比較

The World University Rankings 2014 - 2015						Research Excellence Framework (REF) 2014 *1				2015 - 2016 研究助成額 (£) *2	
研究 評価 順位	Research	Citations	前2者 の平均	国内 順位	総合 順位	機関名	総合 順位	評価 平均値	申請 ユニット 数		機関名
1	97.7	95.5	96.6	1	3	University of Oxford	1	3.36	14	Imperial College London	94,123,834
2	95.6	95.2	95.4	2	5	University of Cambridge	2	3.35	14	London School of Economics and Political Science	18,592,522
3	88.3	89.4	88.9	3	9	Imperial College London	3	3.34	31	University of Oxford	139,061,600
4	80.4	85.1	82.8	4	22	University College London	4	3.33	32	University of Cambridge	120,096,538
5	62.9	88.3	75.6	6	36	University of Edinburgh	5	3.27	27	Cardiff University	39,796,996
6	62.3	88.3	75.3	7	40	King's College London	6	3.23	27	King's College London	65,340,267
7	74.2	71.3	72.8	5	34	London School of Economics and Political Science	7	3.22	36	University College London	131,610,416
8	58.7	74.3	66.5	8	52	University of Manchester	7	3.22	23	University of Warwick	34,879,132
9	44.7	85.1	64.9	9	74	University of Bristol	9	3.18	31	University of Edinburgh	81,363,000
10	40.7	88.9	64.8	10	83	Durham University	9	3.18	31	University of Bristol	46,556,048
11	33.8	90.5	62.2	16	113	University of York	9	3.18	21	Queen Mary University of London	32,142,560
12	40.5	83.7	62.1	11	94	University of Glasgow	12	3.17	24	University of York	22,713,118
13	30.4	92.8	61.6	15	111	University of Sussex	12	3.17	35	University of Sheffield	42,725,720
14	32.9	88.9	60.9	13	107	Queen Mary University of London	12	3.17	13	University of Bath	17,112,308
15	22.4	98.9	60.7	17	118	Royal Holloway, University of London	15	3.16	35	University of Manchester	68,800,260
16	35.9	81.4	58.7	14	111	University of St Andrew's	16	3.15	16	Lancaster University	18,934,055
17	36.1	78.0	57.1	19	131	Lancaster University	16	3.15	26	University of Southampton	45,399,243
18	45.8	68.2	57.0	12	103	University of Warwick	18	3.14	23	Durham University	24,853,129
19	34.1	79.7	56.9	20	132	University of Southampton	19	3.13	20	University of St Andrew's	17,656,000
20	27.3	86.4	56.9	27	196	St George's, University of London	19	3.13	33	University of Leeds	43,849,972

出典：Times Higher Education World University Rankings 2014-2015：<https://www.timeshighereducation.co.uk/world-university-rankings/2015/world-ranking>  
Research Excellence Framework 2014：<https://www.timeshighereducation.co.uk/sites/default/files/Attachments/2014/12/17/k/a/s/over-14-01.pdf> より筆者作成

\*1 REFで上位の評価を得ている Institute of Cancer Research と London School of Hygiene and Tropical Medicine は、世界大学ランキングが対象とする総合大学ではなく研究機関であり、申請ユニット数も2と少ないため、ここでは対象外とした。

\*2 イングランドの大学については、イングランド高等教育財政会議 (HEFCE) の発表より (<https://www.timeshighereducation.co.uk/news/winners-and-losers-in-hefce-funding-allocations/2019306.article>)  
Edinburgh、Glasgow、St Andrew's のスコットランドの3大学については、スコットランド資金会議 (SFC) の発表より ([http://www.sfc.ac.uk/web/FILES/Announcements\\_SFCAN062015/Outcome\\_Agreements\\_for\\_universities\\_indicative\\_research\\_funding\\_decisions.pdf](http://www.sfc.ac.uk/web/FILES/Announcements_SFCAN062015/Outcome_Agreements_for_universities_indicative_research_funding_decisions.pdf))  
ウェールズに属する Cardiff 大学については、ウェールズ高等教育財政会議の発表より ([https://www.hefcw.ac.uk/documents/publications/circulars/circulars\\_2015/W15%2009HE%20HEFCW%20Funding%20Allocations%202015\\_16.pdf](https://www.hefcw.ac.uk/documents/publications/circulars/circulars_2015/W15%2009HE%20HEFCW%20Funding%20Allocations%202015_16.pdf))

## 世界大学ランキングといかに向き合うか【4/4】

上位から並べた。また、REFの方は36の分野(ユニット)毎の評価の平均値である。

THE-WURとREFで上位の顔触れに大きな差は見られず、大半の大学が20位以内の順位差に収まっている。REFの順位が僅かな点数の違いで大きく変動しやすいことを考えると、両者の評価はかなり共通していると言える。ここから直ちに何らかの結論を引き出すことには慎重であるべきだが、市場型評価と制度型評価で別々の対応が必要となるのではなく、大学の研究力を地道に高めることが両者の評価に繋がるといふ指針が得られれば、意味のある比較である。

一方で、詳細に見ていくと、両者で大きく順位が異なる大学が見られる(Sussex大学 (THE研究ランク13位、REF37位)、Cardiff大学 (THE30位、REF5位)、Bath大学 (THE39位、REF12位)。表中では太字)。これらの大学については、個別に原因の分析が必要である。

また、表2はREFにおける自然・社会・人文科学の代表的分野(物理、法律、英語学・英文学)の分野別評価だが、総合評価であるTHE-WURでは名前の挙がってこない大学が多く上位に名を連ねている。例えば、物理で第1位のStrathclyde大学や、法律で第4位の

(表2) THE-WUR 2014 - 2015 / REF2014 結果比較

Physics (Unit 9)			Law (Unit 20)			English Language and Literature (Unit 29)		
順位	機関名	評価平均値	順位	機関名	評価平均値	順位	機関名	評価平均値
1	<b>University of Strathclyde</b>	<b>3.35</b>	1	King's College London	<b>3.44</b>	1	University of Warwick	3.53
2	University of Oxford	3.34	2	London School of Economics and Political Science	3.4	2	University of York	3.49
3	University of Edinburgh (joint submission with St Andrews)	3.33	3	University of Durham	3.34	3	University of Newcastle	3.46
4	University of Nottingham	3.33	4	<b>University of Ulster</b>	<b>3.33</b>	4	University of Durham	3.42
5	University of St Andrews (joint submission with Edinburgh)	3.33	5	University College London	3.32	5	University of Queen Mary	3.41
6	University of Cardiff	3.3	6	University of York	3.31	6	University of St Andrews	3.4
7	University of Cambridge	3.29	7	University of Cambridge	3.27	7	University College of London	3.36
8	University of Manchester	3.29	7	University of Leeds	3.27	7	<b>University of Swansea</b>	<b>3.36</b>
9	University of Durham	3.27	9	University of Bristol	3.25	9	University of Sussex	3.28
10	Imperial College London	3.26	10	University of Oxford 他2	3.23	10	University of Nottingham 他2	3.27

Ulster大学など(表中、太字)はTHE-WURでは400位以内にも入っていない。THE-WURの評価に関わらず、独自の強みにより評価を得ている大学があるという事実は特記に値する。

現在、英国では、研究に関する評価としてREFがあるが、政府がREFに倣って創設することを検討している教育評価制度(Teaching Excellence Framework: TEF)<sup>15</sup>が実現し、教育を含めた制度型評価が整備されていけば、さらに包括的な比較が可能となるだろう。

### Conclusion

高等教育関係者は世界大学ランキングとどのように向き合うべきか。ランキングが普及し始めた初期には無視するという選択もあり得たが、ランキングが各国の高等教育政策に組み入れられるようになった現在、全く無関係であることは難しい。関係者にはランキングの特性を理解して適切に対応することが求められる。

論文被引用数などと同じく、大学ランキングの数字は一人歩きしやすいものであると同時に、ランキングでの上昇自体を目的化した誤ったインセンティブを生みやすい。これを防ぐには、多様な評価方法の中でランキングを絶えず相対化する

とともに、ランキングを離れた大学の強みを模索する努力が必要である。

一方で、これも論文被引用数と同じく、全体として見た場合、ランキングでの上昇は正当な目標に向けられた努力を反映しているであろう。すなわち、毎年のランクの浮沈に一喜一憂することには意味がないとしても、長期間にわたりランキングの上位にあることはその大学の実力を表していると思われる。

その意味で、日本の大学が一つでも多く、各世界大学ランキングの上位に常時名を連ねるようになることを期待したい。

(JSPS London アドバイザー・成瀬)

<sup>11</sup> [www.ireg-observatory.org/index.php?option=com\\_content&task=blogcategory&Itemid=104](http://www.ireg-observatory.org/index.php?option=com_content&task=blogcategory&Itemid=104)

<sup>12</sup> 市場型評価と制度型評価という用語法および両者を対置する視点は、小林雅之他「世界大学ランキングの比較」(私学高等教育研究所、2005年3月)をはじめとする一連の論考に負う。

<sup>13</sup> 英国の研究評価制度(REF)では、評価パネルの委員になると3ヶ月~半年間、専任で従事しなければならない程度の作業量が発生するとのことである。また、REF2014の総費用は約£2.5億で、これは期間中の英国の総研究助成額の約2.4%にあたる。  
<https://www.timeshighereducation.co.uk/news/ref-2014-cost-250-million>

<sup>14</sup> REFの詳細については、過去のJSPS London News Letter No. 41, No. 44の本欄を参照のこと  
[www.jpsps.org/newsletter/JSPSNL41L.pdf](http://www.jpsps.org/newsletter/JSPSNL41L.pdf)

[www.jpsps.org/newsletter/JSPS\\_Newsletter44\\_Low.pdf](http://www.jpsps.org/newsletter/JSPS_Newsletter44_Low.pdf)

<sup>15</sup> [www.hefce.ac.uk/news/newsarchive/2015/Name\\_104412\\_en.html](http://www.hefce.ac.uk/news/newsarchive/2015/Name_104412_en.html)

## 2分でわかる！ファンレーシング入門 最終回

### マラソン大会とチャリティー

ロンドンで毎年4月に開催される春の風物詩「ロンドン・マラソン」は、国際陸上競技連盟の格付けでゴールドランクに格付けされており、2003年には英国人選手ポーラ・ラドクリフ選手が女子マラソンの現世界記録を樹立したことで知られている。日本人から見ると、この大会は国際競技会と言うイメージが強いのではないだろうか。

このレースは、子午線で有名なグリニッジ旧王立天文台近くから出発して、バッキンガム宮殿前がゴールの42.195キロのレースである。参加人数は桁外れで、出走する選手は5万人以上、当日沿道に駆けつける人数は75万人という最大級のイベントだ。因みに、ロンドンの地下鉄は、毎年この日、1日当たりの最多乗客数を記録するとも言われている。

この大会に選手として参加するには、至難の技で、毎年4月末に次年開催分（一般枠）の応募が始まるが、なんと1～2日間で応募が締め切られるという人気ぶり。その後、抽選が行われるが、1割程度しか当選しないとの非公式情報がネット上に踊っている。そんな訳で、この最大級の大会に選手として確実に参加したいなら、もう一つの方法であるチャリティー枠に申し込むしかない。

実はこの大会、ただの国際競技会ではなく、世界最大のチャリティーイベントとしての側面も持つ。毎年開催されてい

るチャリティーイベントの中で、1日で集める寄付金が最大のイベントというギネス記録も保持しているのだ。

ロンドン・マラソンの公式HPを見ると、国連機関であるユニセフ、貧困者や弱者の生活援助を実施する慈善団体等や、Cancer Research UKに代表される研究助成を実施するチャリティー団体まで、合計で80程の団体が登録されている。チャリティーランナーとして参加を希望する選手は、そのリストにある特定の団体を選んで、参加申し込みを実施し、団体が保有するマラソンの参加枠を提供してもらう。その代わりに、選手は、チャリティー団体に代わって、知人や友人等から寄付金を集めると言うものだ。寄付金額は、団体によって異なるが、凡そ1,500～1,800ポンド。

選手は、参加費用（寄付金）を工面するために、個人目標を設定して友人や知人等から寄付を募るのである。例えば、自己ベスト記録更新や、何位以内でゴールする等といった具合である。

その目標設定をすることで、友人や知人の関心を引き出すことができる。友人や知人たちは選手を応援しながら少額でも社会貢献ができるという満足感、選手は大会に出場できるという満足感、チャリティー団体は寄付金が集まると言う満足感。大会に関わる全ての人が満足感を味わう事ができるという上手い仕組みが出来上がっている訳だが、このチャリ

ティー団体先に英国の大学を見つける事ができなかった。

昨年の6月、英国の教育関連チャリティー機関であるThe Sutton Trustは、「Academic Assets: University Fundraising-An Update」と題する調査報告書を発表した。この報告書は、英国の大学基金の活動と、米国の其れとを比較調査したものだ。結果として、英国の大学の募金活動は米国と比較して、そのギャップは10年前と殆ど変わっていないと言う。因みに、ハーバード大学の大学基金は、190億ポンド（約3兆6,100億円\*）以上で、英国の全ての大学基金の合計額110億ポンドを遥かに上回っていると言う驚くべき現状だ。

更に報告書では、高等教育分野の募金活動能力を更に強化するため、①2008年から2011年にかけて導入し成功を取めたマッチ・ファンディング制度を改良して実施すべき、②寄付金に関するより簡潔な優遇税制度を導入すべき等の提言を行っている。しかしながら、政府主導による制度改革には、幾つかのハードルを越えなければならず、短期的に実施するのは難しい。

そこで、この英国最大級のチャリティーイベントに、英国の大学も積極

的に参加し、教育・研究資金を集める事も検討すべきではないだろうか。実は、日本の大学では、このようなチャリティーイベントに名乗りを上げている大学もある。それがノーベル医学・生理学賞を受賞した山中伸弥教授が代表を務める京都大学iPS細胞研究所だ。自身も、2012年3月の京都マラソンに参加し、京都大学iPS細胞研究基金のため、完走を公約に掲げ、多額の寄付金を集めたが、今回は研究所自体が大阪マラソンで、寄附先団体として登録している。

この様に、大学の寄付金集めも多様化しており、慈善団体と同様にチャリティーイベントに積極的に参加する時代に突入してきた。今後、日本の大学も、厳しい大学の国際的競争を勝ち抜くためにも、教育・研究資金の確保に様々な試行錯誤を実施する必要があると感じている。

（松本）

\*1ポンド190円で計算



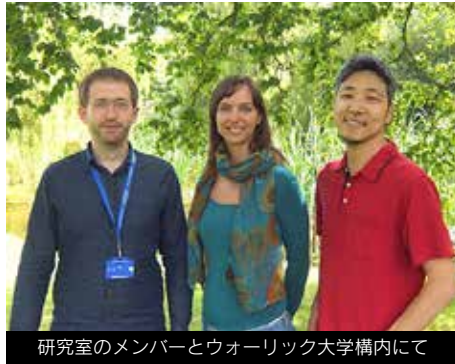
誰のために走る？ランナー選



# 在英研究者の者窓から

シャウ

第四回



研究室のメンバーとウォーリック大学構内にて

2014年3月、面接のために初めてイギリスにやってきました。空港に降り立ち、さて面接先を目指そうとしたのですが、とにかく英語が聞き取れない！アメリカに5年間おり、英語の聞き取りに苦労する事も少なくなっていたのですが、慣れないアクセントに悪戦苦闘。ほうほうの体でホテルについたものの、またまた英語が聞き取れずインターネットに接続するのも一苦労でした。なんとか面接を終え、帰りの飛行機でアメリカ英語が聞こえた時に心底ほっとしたのをよく覚えています。ちなみに、アメリカ人にとっても、イギリス英語を聞き取るのは苦労するそうです。それでも、運よく現所属先のウォーリック大学よりオファーを頂き、2014年9月にイギリスに引っ越ししてきました。

日本にいる頃には、「欧米」といっしょくたに考えてしまっている所があったのですが、文化、大学システムという点で、英国と米国の間には、英国と日本と同じくらいの距離感がある様に感じます。英国人の知人も、「文化的にはむしろ米国

英国で研究を行っている日本人研究者の数は、JSPS Londonの在英日本人研究者(JBUK)にご登録いただいている方だけでも300名以上。そのような方々は、どんなきっかけで渡英し、どのようなことを感じ、どのような研究をされているのでしょうか。このコーナーでは、様々なバックグラウンドの在英研究者の方に、普段なかなかうかがい知ることのできないそれらの内容について、語っていただきます。

ウォーリック大学 生命科学科 アシスタントプロフェッサー 浅利 宗弘  
Munehiro Asally, Assistant Professor (<http://homepages.warwick.ac.uk/staff/M.Asally>)

2007	大阪大学 生命機能研究科 博士一貫課程修了、博士(理学)
2007 - 2009	大阪大学 生命機能研究科 ポスドク研究員
2009 - 2012	テキサス大学サウスウェスタン ポスドク研究員
2012 - 2014	カリフォルニア大学サンディエゴ校 アシスタントプロジェクトサイエンティスト

よりも日本の方が近いかも」と言っていたので、自分の感覚もあながち的外れではないのでしょうか。もちろん、私が経験してきたのはそれぞれの国のごく一部の町のごく一部の大学だけで、一般化すべきではないのですが、簡便のために一般化してアメリカとイギリスの違いとして、特に大学に関する事についての体験を書いてみたいと思います。

まず、大学での採用面接についてです。アメリカではポスドクやテクニシャンの面接・採用は、PIの一存に任されています。ポスドクに関しては、公募が出ていなくても興味のある研究室にメールで問い合わせるのが一般的で、公募広告が出ていたら「人が集まらない理由があるのでは？」と穿った見方をされかねません。一方、イギリスではポスドクの採用にも、一定期間の公募をだす事が義務付けられています。特にEU圏外から採用するためには、1ヶ月間公募を出すことが最低条件です。また、公募には、職務内容と採用基準が明記され、記載された基準に則って選考する事が求められます。

つまり、どれほど素晴らしい候補者がいても、公募に記載された選考基準以外の要素で候補者を選考できません。こう聞くと、イギリスのシステムがより公平で素晴らしい様に思えるかも知れませんが、実際には、曖昧で解釈の余地を残した表現が横行しているだけ、というのが正直な印象です。面接の際には、候補者全員に同じ質問をし、面接官は各質問に対して詳細なメモをとり人事部に提出する事が求められます。また、うちの大学では、計3人以上のアカデミアが面接する事が義務付けられています。とにかく、ポスドクを雇うにも踏まえなければいけない手続きが非常に多いです。最近の移民法の改正に伴って、EU圏外からポスドクを採用する事が実質的に不可能になってしまう可能性もあり、今後の動向が気になるところです。

テニュアトラックのポジションについては、アメリカでもイギリスでも公募が出るのは同じなのですが、面接の過程が大きく異なります。アメリカでは、ショートリストされた候補者は面接の際に、こ

れまでの研究成果の発表に加え、チョークトークとよばれる将来の研究計画についてみっちり発表します。私がいたUCSDでは、各候補につき2日間みっちり面接が行われ、コミッティ以外の研究科のメンバーとも1対1でじっくりと話し合います。一方、イギリスでは、面接過程はポスドクのものとは基本的に大差がありません。ショートリストされた候補者が全員同じ日に呼ばれ面接を受けます。短い研究発表の後にコミッティから面接をうけるのですが、この際にも、同じ質問が全候補になされます。自分が面接に来た際には、全候補者が同じ日に呼ばれる事にも驚きましたが、わずか20分の発表と40分ほどの面接だけで決定がなされる事にとっても驚きました。

もうひとつ、こちらの大学にきて驚いた事は、博士課程の年数です。日本では、博士前・後期合わせて5年というのがひとつの基準で、医学系ではさらにもう1年、またここ数年の状況は分かりませんが、自分がいたころには進捗状況によっては6年かかる事も珍しくは無かったと思います。アメリカでも、日本と同様に5年が目安にはなっていますが、6~7年かかる事は全く珍しくありません。日本と異なるのは、大学院生にはPIの研究費から給料が払われることでしょうか。PIは、大学院生の給料・福利厚生に加えて授業料も払う必要があり、授業料を加味すると大学院生にかかる経費は、ポスドクにかかる経費とそれほど変わらない額になります。一方、イギリスでは、博士課程は基本的にわずかに3年です。一





部に4年間のもありますが、その場合には1年間が授業に費やされ、実質的に研究プロジェクトに取り組めるのは3年のみです。私の専門である実験生物学では、どうしても実験に時間がかかることもあり、3年間で何かを仕上げさせなければいけないというのは、相当なプレッシャーです。実際のところ、論文を出さないままに博士課程を修了するのも珍しいようです。

そんなこんなで、いろいろな違いに戸惑いながらですが、長年の夢であった「自分の研究室」を持たたというのは、とにかく幸運としか言いようがなく、充実したイギリス生活を送っています。といっても、8ヶ月ほど1人っきりの研究室で、ほとんど何も出来ないままに時間が経ってしまった、というのが正直なところです。最近ようやくポスドク研究員が入ってきてくれ、また9月から修士の学生さんが入ってくる予定で、ようやく少しずつ研究室らしくなってきました。中心的な研究テーマは、「バクテリアの多細胞生物学的ふるまいの理解と応用」で、納豆菌の仲間の *Bacillus subtilis* というバクテリアを用いて研究を行っています。バクテリアというと、単細胞生物でそれぞれの細胞が分裂していくだけ、というのが古典的な捉え方でしたが、ここ数十年の研究で、バクテリアがバイオフィームと呼ばれる集合体を形成し、ときに多細胞生物学的なふるまいをする事が分かって

きました。私の研究室では、蛍光経時観察、分子生物学、数学モデルを組み合わせ、バイオフィーム形成過程においてバクテリアが協調して働く仕組みの解明に取り組んでいます。また、バイオフィームは、さまざまな応用利用が期待されており、難分解性の毒性物質の分解促進にバイオフィームを利用する研究などを行っています。研究環境は、所属している Warwick Integrative Synthetic Biology Centre が大きなグラントを最近獲得したこともあり、最新の研究機器が利用できます。異分野間での交流も活発で、新しいことを学ぶ機会にも恵まれています。現在のポジションは所謂テニユアトラックで、数年後に首にならないためには、研究費を獲得し、論文を出し、授業をして、もろもろの学校行事に貢献し・・・と課題がたくさんあり、プレッシャーを感じざるを得ないのですが、半ば開き直りつつ、幸運にも与えられた機会を存分に活かして研究に励んでいます。

.....  
**JBUK へのご登録はこちら** ご希望の方に、JSPS London が開催するネットワークイベントのご案内やニュースレター等をお届けしています。下記リンクにてご登録ください。なお、対象は英国の大学・研究機関に所属する研究者（ポスドク・大学院生含む）及び在英日系企業研究所の研究者の方です。  
リンク：<https://ssl.jps.org/members/?page=regist>

## Q 英国人の余暇の過ごし方 (前編)

英国の人々はどのようなことをして余暇を楽しんでいるのでしょうか？(今号では、平日、仕事が終わったあと、また、週末の過ごし方についての情報をお届けします。)

**A** まず、当然ながら、年齢層や家族構成、住環境(都市部/郊外)や個人個人のライフスタイルによって異なりますが、大まかには以下のようなことが言えます。

仕事をしている人の平日のアフター5は、パブで軽く飲む、ジムやジョギングで体を鍛える、ペットの犬を散歩させる、テレビを見る、といったことなどが人気があります。特にテレビは、チャンネルの多さや英国のオリジナルドラマのみならず、海外(特にアメリカ)ドラマもたくさん放映されることもあり、ほとんど「中毒」になっている人もいます。また、契約条件にもよりますが、見逃した番組でも、放送終了後ある程度の期間、いつでも見られるようなシステムも発達しているため、連続ドラマやシリーズもののドキュメンタリーも無理なく追うことができます。

週末は、友達や家族と過ごす人が多いです。パブやレストランに行き、おしゃべりや食事をゆっくり楽しみます。夏の時期は日も長いので、自宅の庭でバーベキューパーティをして遅くまで楽しむ人もたくさんいます。

※次号の後編は、英国人の長期休暇の過ごし方についてです。お楽しみに！

日本人の素朴な疑問に英国人ばかりさんが答えてくれます。なにか疑問に感じたら、①氏名 ②所属 ③住所 ④質問事項を明記のうえ、ニュースレター編集室 [enquire@jps.org](mailto:enquire@jps.org) まで、お送りください。質問採用者には粗品を差し上げます。

英国人  
の  
余暇  
の  
過ごし方  
箱

t a m a t e b a k o



## 日本政府系法人勉強会（通称アドミ会）に出席

2015年5月12日、石油天然ガス・金属鉱物資源機構（JOGMEC）ロンドン事務所において、日本政府系法人勉強会（通称アドミ会）が開催され、当センターからは副センター長の松本が参加した。この勉強会は2008年に発足し、2～4ヶ月毎に参加法人の持ち回り幹事の下で実施され、主に事務所が抱える管理業務における問題点に関して意見交換を行っている。参加法人は、CLAIR/JLGC（自治体国際化協会）、JAMS（日本海難防止協会）、JETRO（日本貿易振興機構）、JF（国際交流基金）、JICA（国際協力機構）、JNTO（国際観光振興機構）、JOGMEC、JSC（日本スポーツ振興センター）と、当センターを含めた9法人である。

今回の会合では、JAMSを除く8法人11人が参加して、英国自動加入式年金制度、健康保険料負担制度、現地職員の雇用、駐在員の帯同配偶者の就労等、多岐に渡る問題に関して意見交換を実施した。特に、今年の4月から導入されたImmigration Health Surcharge（IHS）制度－National Health Serviceの健康保険料負担問題への関心は高く、支払い方法や時期、金額等に関して積極的に意見交換を実施した。また、併せてJSCから、事務所の賃貸契約のレントレビュー手続き、移民局からの査察対応策、ジャパンハウス構想の最新情報の提供があった。

アドミ会終了後、JOGMEC事務所近くの中中華レストランで恒例の懇親会が行

れ、今回は、私とJFの職員の任期が近々終了することから、送別会も兼ねて実施された。送別会にて別れの挨拶をしながら、自身の2年程のロンドン滞在の記憶が走馬灯のように蘇ってきた。ロンドンにきた当初は、慣れない環境下で、事務所の運営を任せられ、上司にも、同僚にも相談できない問題を解決する糸口は、このアドミ会で見つけることができた。その意味でも、この様な勉強会を定期的実施する意義は大きい。

2013年4月に前任者からバトンを受け、様々な困難もありながら、2年3ヶ月と言う期間を無事に走り抜けることができた。それは一重に、私を支えてくれた多くの方々のお陰だと、この懇親会に参加しながらしみじみ感じていた。この場を借りて、在任中お世話になった全ての皆様に対し、感謝を申し上げます。皆様、本当にありがとうございました。また、どこかでお会いするのを楽しみにしています。（松本）



アドミ会懇親会にて

## JBUK/JSPS London 共催の日英交流イベントをUCLが開催

7月16日と23日にUCL（University College London）で2つの日英交流イベントが開催された。いずれもUCL眼科学研究所の大沼信一教授がオーガナイザーを務められたもので、大沼教授は当センターが支援する在英日本人研究者ネットワーク（通称JBUK）のメンバーである縁から、JBUK/JSPS Londonの共催という形となった。

1つ目のイベントは「東日本大震災後の福島再生」というシンポジウムで、福島県の内堀雅雄知事のスピーチから始まって、福島県の高校生が、震災前後の生活の変化や、放射性物質測定の研究結果について流暢な英語でプレゼンを行った。福島と海外各国の協力校の高校生達が日常生活圏内の放射性物質を測定した結果、福島と他の国とで有意な差はなかった、というサイエンティフィックな発表表に、日英の多くの聴衆が感銘を受けた。



高校生によるプレゼンの様子

2つ目のイベントは、Satsuma 19の150周年を記念したもので、大阪大学共催の「社会起業家」をテーマとしたシン

ポジウムと併せて、盛大なセレモニーが開催された。Satsuma 19とは、1865年に薩摩藩が留学生として英国に派遣した若者19名のことで、帰国後には、初代文部大臣となった森有礼など、それぞれが明治維新後の日本の発展に大きく貢献した。UCLは、イギリスで最初に留学生に門戸を開いた大学と言われ、Satsuma 19もUCLに迎えられて、150年前のロンドンで勉学と見聞を深めたわけである。150年後の我々も、Satsuma 19の意欲と、彼らを温かく迎え入れたUCLの双方の姿勢を見習って、日英の交流と人材育成に貢献したい、と初心に立ち返るイベントであった。（大萱）

### JBUKメンバーの セミナー開催を支援します

当センターでは、イギリスでPIとして活躍し、日英学術交流の柱となっておられるJBUKメンバーの活動を、広く紹介し、支援していきたいと考えています。その一環として、JBUKメンバーが日本から講師を招聘し、日本の最先端の研究成果について、イギリスの研究者や学生を対象に紹介してもらおう、といった小規模なセミナーを開催する場合には、JBUK/JSPS London共催のセミナーとして講演謝金をサポートする枠組みを始めました。このような日本人研究者の招聘やセミナーを計画中のJBUKメンバーは、お気軽に当センターまでご相談ください。

This page provides you the useful information about JSPS Programmes and events. Please check each website page for more details.

Application periods for these programmes are around the same time every year so you can apply for next year (or next call) if you cannot prepare your application for this call.

## JSPS Fellowship Programmes

\* **These application periods are for the head of the host institution to submit applications to JSPS Tokyo; the time frames for host researchers to submit their applications to their institution are normally earlier. Therefore, Fellowship candidates must discuss their preparation schedules with their host researchers.**

### ◆ Postdoctoral Fellowship Programmes (Short-term / Standard / Pathway)

#### Short-term for North American and European Researchers

Call for FY2016 (1st Recruitment)

Duration: 1 to 12 months

Application Period: 5 – 9 Oct 2015

Commencement: 1 Apr 2016 – 31 Mar 2017

[www.jspso.org/english/e-fellow/application.html](http://www.jspso.org/english/e-fellow/application.html)

\* JSPS London also receives applications for Postdoctoral Fellowship (Short-term) twice a year. Next application deadline will be 1st December 2015. We'll update our website about the details around October.  
[www.jspso.org/funding/index.html](http://www.jspso.org/funding/index.html)

#### Standard

Call for FY2016 (1st Recruitment)

Duration: 12 to 24 months

Application Period: 31 Aug 2015 – 4 Sep 2015

Commencement: 1 Apr 2016 – 30 Sep 2016

[www.jspso.org/english/e-fellow/application.html](http://www.jspso.org/english/e-fellow/application.html)

\* JSPS also receives applications for Standard fellowship through nominating authorities in the UK. For information on the application procedure, please contact directly the nominating authorities which are **British**

**Academy** (for all fields of the humanities and social sciences / application deadline: December, TBC) and **Royal Society** (for the natural and physical sciences / application deadline: February, TBC).

(FYI)

BA:

[www.britac.ac.uk/funding/guide/intl/jspso.cfm](http://www.britac.ac.uk/funding/guide/intl/jspso.cfm)

RS:

<https://royalsociety.org/grants/schemes/jspso-postdoctoral/>

### Pathway to University Positions in Japan Call for FY2016

Duration: 12 to 24 months

Application period: 31 Aug 2015 – 4 Sep 2015

Commencement: 1 Apr 2016 – 30 Nov 2016

[www.jspso.org/english/e-fellow/application.html](http://www.jspso.org/english/e-fellow/application.html)

### ◆ Invitation Fellowship Programmes (Long-term / Short-term / Short-term S)

\* These programmes are designed to enable Japanese researchers to invite their overseas colleagues to Japan to participate in cooperative work and other academic activities. Researchers of all countries having diplomatic relations with Japan are eligible. Applications are submitted by the inviting researchers who wish to host overseas researchers in Japan. JSPS offers three Invitation Fellowships, which are Long-term programme for lecturer to professor level, Short-term for reader, professor etc. level, and Short-term S for Nobel laureate level. Please check JSPS website as below for more details.

Call for FY2016

Long-term

Duration: 2 to 10 months

Application period: 31 Aug 2015 – 4 Sep 2015

Commencement: 1 Apr 2016 – 31 Mar 2017

Short-term (1st Recruitment)

Duration: 14 to 60 days

Application period: 31 Aug 2015 – 4 Sep 2015

Commencement: 1 Apr 2016 – 31 Mar 2017

Short-term S (1st Recruitment)

Duration: 7 to 30 days

Application period: 31 Aug 2015 – 4 Sep 2015

Commencement: 1 Apr 2016 – 31 Mar 2017

[www.jspso.org/english/e-inv/index.html](http://www.jspso.org/english/e-inv/index.html)

## JSPS Bilateral Programmes

Joint Research Projects/Seminars

Call for FY2016

Application Period: 25 Aug 2015 – 8 Sep 2015

[www.jspso.org/english/e-bilat/index.html](http://www.jspso.org/english/e-bilat/index.html)

## Core-to-Core Programme

Call for FY2016

Application Period: 4 Sep 2015 – 6 Oct 2015

[www.jspso.org/english/e-c2c/index.html](http://www.jspso.org/english/e-c2c/index.html)

## JSPS London events

### ◆ Symposium

JSPS London is holding symposia every year under the JSPS London Symposium Scheme.

“Loch Lomond Symposium on Action Anticipation” on 2 to 3 Sep 2015 (Ross Priory, Loch Lomond, Scotland)

<https://actionanticipation.wordpress.com>

“Pupil Informatics: light flux sensing, non-image forming pathways and blindsight” on 15 Sep 2015 (University of Oxford)

[www.psy.ox.ac.uk/research/perception-lab/international-pupil-colloquium/pupil-informatics-symposium](http://www.psy.ox.ac.uk/research/perception-lab/international-pupil-colloquium/pupil-informatics-symposium)

“Deconstructing boundaries: Is ‘East Asian Art History’ possible?” on 10 to 11 Oct 2015 (Khalili Lecture Theatre, SOAS, University of London)

<https://www.soas.ac.uk/jrc/events/deconstructing-boundaries-is-east-asian-art-history-possible/10oct2015-deconstructing-boundaries-is-east-asian-art-history-possible.html>

### ◆ JSPS Programme Information Event

JSPS London visits universities in the UK time to time, to have a programme information event to introduce and explain our funding programmes. If you have any interest, please contact [enquire@jspso.org](mailto:enquire@jspso.org) or 020-7255-4660.

## Useful Information

JSPS London Facebook 

<https://www.facebook.com/jspso.org>

### For Japanese researchers in the UK 在英日本人研究者の皆様へ

ご希望の方に、JSPS London が開催するイベントのご案内やニュースレター等をお届けしています。下記リンクにてご登録ください。なお、対象は、英国の大学・研究機関に所属する研究者（ポスドク・大学院生含む）及び在英日系企業研究所の研究者の方々です。

<https://ssl.jspso.org/members/?page=regist>

JSPS Monthly (学振便り) は、JSPS の公募案内や活動報告等を、毎月第1月曜日にお届けするサービスです（日本語のみ／購読無料）。情報提供を希望される方は、下記のリンクにてご登録ください。

[www.jspso.org/j-mailmagazine/index.html](http://www.jspso.org/j-mailmagazine/index.html)

(Nishizawa)

## 大萱副センター長ご挨拶

7月に当センター副センター長として着任しました。6月までは学振本部で科研費を担当しており、国際交流の仕事は久しぶりです。着任直後に Southampton 大学等を訪問する機会を得て、こちらの大学の教員や学生の多民族、多国籍ぶりに驚く一方で、英国王立協会の Sir のタイトルを持つ研究者にお会いして、伝統を重んずる一面にも触れました。ロンドンから見ると、日本ははるか彼方、まさに Far East です。イギリスの大学や研究者が共同研究相手を選ぶときに、この地理的、文化的なギャップが日英交流のひとつの障壁になっている事実は、現代においても否めません。しかし、それを超

えて研究の「面白さ」を共有し、長年交流を続け、学術の発展に貢献されている日英双方の研究者が大勢いることに、勇気づけられます。私自身も、当センターの一員として、日英の学術交流を支えるべく努めていきたいと思えます。



大萱 千草  
(おおがや ちくさ)

ロンドン交通博物館の床に書かれていたテニス・ガボールの言葉にハッとさせられました。テニス・ガボールは、ホログラフィーの発明により 1971 年にノーベル物理学賞を受賞、インペリアル・カレッジ・ロンドンで応用物理学の教授を長く務めました。ガムがこびりついているのはご愛嬌。予測できない未来を人類が生き抜くための知



恵を生み出すのが基礎研究であり、その基礎研究を支援するのが JSPS の役割です。  
(大萱)

編集を  
終えて



今号の巻頭特集では、ブリティッシュ・カウンシルにその活動状況をご寄稿いただきました。英国大学視察訪問や大学のレピュテーション・マネジメントなど、興味深いトピックが並んでいます。また、新たな試みとして、「日本人研究者の受入れに熱心な英国の大学に所属する日本人研究者」のリストを掲載しておりますので、是非ご覧ください。当センターは、PIとして英国でご活躍されている日本人研究者の様子を広く配信することで、日英の学術交流の更なる促進に貢献したいと考えております。

表紙写真は、「ある夏の日 of Kensington Gardens」です。晴れた日の公園は本当に気持ち良く、朝から晩まで、大勢の人が思い思いに楽しんでいます。木陰で遠くを眺めながら物思いに耽る人や、ダンスを踊る人も。  
(岡田)

監修：竹安 邦夫  
編集長：大萱 千草  
編集担当：岡田 高文



### 日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター (JSPS London)

14 Stephenson Way, London NW1 2HD United Kingdom

TEL: +44-(0)20-7255-4660 / FAX: +44-(0)20-7255-4669

email: [enquire@jps.org](mailto:enquire@jps.org) Website: <http://www.jps.org/index.html>

